

美瑛川さと川づくり-未来を担う子供達に誇れる「ふるさと」を作ろうー (北海道・旭川市)

地域の若手農業者が平成5年から行っているまちづくり活動の中で、阪神大震災の被災児童23名の疎開を受入れたところ、都会から来た子供達が見違えるように元気になって帰郷したことから自然や田舎の偉大さに気付きました。その後、地域と関わりの深い美瑛川・辺別川の川づくりを住民主体で行うため、「特定非営利活動法人グラウンドワーク西神楽」を設立、美瑛川さと川づくり事業を発足し、フットパス整備、環境学習等を実施し16年目となります。

また、「まちづくりボランティアの目的は地域の課題解決」と考え、課題を整理し各々の専門委員会にて、歴史の継承や自主防災組織の立ち上げ、高齢者福祉等を実践し、10名程で始めた活動は100名を超え、年間来場者が4万人を超す手づくりの「さと川パークゴルフ場」の整備、運営と併せ、着実に地域に根ざしています。



商店街「みち広場」の整備と運営による賑わいづくり
～デイバザール、ナイトバザール、夢やたい

(山形県・鶴岡市)

20年以上続けてきたナイトバザールを発展させ、活気ある商店街を取り戻そうと「鶴岡山王商店街振興組合」を中心として活動を開始しました。市の街路事業と合わせて、住民とまちづくりワークショップを重ねながら、テナントミックス等のハード面の改善やバザール等の企画・運営のソフト面を連携させることにより、にぎわいを取り戻すことができました。若者の出店希望者も増えていることから、商店街に残る町家の改修し、出店できる環境を整えるために「町家再生プロジェクト」も進めています。第3土曜日に開催されるナイトバザールでは、毎回4,000人を超える来客者が訪れ、地域の交流の場となっています。



「足尾の山に100万本の木を植えよう！」官民連携による緑化活動

(栃木県・日光市)

足尾銅山精錬所稼働時代に発生した亜硫酸ガスによって、裸地化した足尾の山から土砂が流出するのを防ぐため、「特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会」は、行政が整備した山腹工整備箇所に緑の復元のための植樹活動を実施しています。平成8年設立以降、活動会員500名及びボランティアにより、初年は参加人数160人で100本から徐々に増え、H25年には1350人で5800本を植樹。累計苗木14万本以上の植樹を実施しました。

また毎月2回の作業デーの他、春の植樹デー、夏の草刈デー、足尾グリーンフォーラム等を開催し、足尾に年間一万人以上が足を運ぶ取り組みや、小中学生等を対象に「見る、学ぶ、体験する」総合的な植樹活動の指導を行い、地球環境保全への啓蒙活動にも取り組んでいます。



遺そう我々の郷土を！伝えよう100年後の子ども達へ！

(埼玉県・幸手市)

桜の咲く時期以外は荒涼となる幸手権現堂堤を昔の美しい土手に戻したいとの思いから、子供の頃遊び場にしていた人達を中心となり「特定非営利活動法人 幸手権現堂桜堤保存会」を平成8年に設立しました。

荒廃した堤の草刈や清掃、崩壊した危険な法面の修復等を行い、四季を通して多くの人に訪れてもらう場所にしようと、桜以外に柴陽花、曼珠沙華などを植え、現在は累計で桜が1000本、紫陽花が15000株、曼珠沙華が100万本、水仙が50万本にまでなりました。さらに、小学生の総合学習として権現堂の歴史を伝える活動、園内で収穫したかぼちゃを福祉施設に食材として提供、ヤギによる除草を行っています。その結果、当初24名だった会員が現在84名となりました。また、今までの地道な活動が新聞やテレビに取り上げられる機会が格段に多くなりました。



「越後みしま 竹あかり街道」

(新潟県・長岡市)

江戸時代の風情ある町並みや寺社仏閣が立ち並ぶ「本町通り」(市道三島274号線)を地元住民、大学生等のボランティアが竹で制作した灯籠で幻想的にライトアップし、「竹あかり街道」として伝統ある三島地域の魅力を創出している。

もともとは里山整備のために伐採した竹の有効利用と、里山整備の必要性を知ってもらう啓発活動としてはじまった。平成22年のイベント開始以降、広報誌等にも取り上げられ、ボランティアの参加人数も徐々に増え約230名に達し、来場者も年々増加(平成22年:3500人、平成24年:6500人)しており、地域活性化に貢献している。



天竜川を次世代に引き継ぐ「天竜川ゆめ会議」

(長野県・駒ヶ根市)

「特定非営利活動法人 天竜川ゆめ会議」は平成14年に設立され、自信と責任をもって天竜川を次世代に引き継ぐための活動を続けています。設立以来実施している外来種の駆除等の環境保全対策、シンポジウム等の講習会には毎年数百人が参加、下流域の環境問題を学習するための「遠州灘アカウミガメ放流ツアー」には毎年約70名の親子が参加する等、活動が地域に広がっています。

また、水防協力団体として広報活動をする等、全国でも先駆的な活動をしています。特に、多自然川づくり研修会等の勉強会には地域の小中学生から高齢者まで幅広く参加し、様々な視点からより「いい川」にするための行政への提言を行っています。



舟参宮の再興 いにしへの川みなどに賑わいをつくる

(三重県・伊勢市)

江戸時代には伊勢神宮参拝の玄関口として多くの人々で賑わった神社港を再生するため、平成14年に地域住民が主体となり「特定非営利活動法人 神かみみなとまち再生グループ」を設立しました。平成18年には交流拠点として海の駅神社が整備され、木造船「みずき」運航による船参宮の再現や伝統行事等のみなとまちづくり活動を通じて地域間交流に努めています。

また、高齢者や放課後児童対策として、「老人憩いの家かたふりの館」や「はまっこ学童クラブ」の開設、10年間毎月継続開催している地産地消市場「辰の市」等、世代を超え活動に参加することで地域のふれあいの場となり、コミュニティの再生に大きく貢献しています。



「水軒堤防の再生」と「市民の公園の実現」

(和歌山県・和歌山市)

水軒堤防は白砂青松の憩いの場であったが、海岸の埋立て以降はゴミ捨場と化した。「水軒の浜に松を植える会」は行政と連携し、「史跡石積堤防」、「白砂青松」、「健康推進」をコンセプトとして約1.7kmの範囲を整備し、2千本以上の松の植樹や公園整備など、水軒堤防の再生に取り組んでいる。

活動により古の風景が甦り、名勝和歌の浦を中心に活動する「玉津島保存会」が新たに設立され地域の魅力向上が伺える。毎年地元中学生が松を植樹し翌年には松を手入れする仕組みや、校歌に謳われる「ハマユウ」を植えることで、郷土愛醸成への寄与も伺える。日々の清掃作業から、年5回のクリーン作戦の他、毎年シンポジウムも開催しており、今後は防災拠点としての役割も視野に整備している。



四百年の歴史に磨かれた町なみ

(奈良県・五條市)

五條市新町地区は、様々な年代の建築物が多く残され、良好な街並みを形成している。「特定非営利活動法人 大和社中」による町並み保存活動により、平成22年には伝建地区に選定された。以降は、町家レストランの整備運営等空き町家の有効利用等に取り組んでいる。死蔵されていた古着物を譲り受け、それらを材料に小物等を製作・販売することが生きがい事業にも発展している。

最近では、20年継続した年に1度の大規模なイベントから、年間を通して開催回数を平準化した小規模なイベントを多く行い訪問者数を安定させる方針として新たな展開も進行中。福祉分野にも活動を広げ、高齢者生活支援として買物代行を始めた。美術大学の拠点誘致を進めアートのある町としての新たな目標も伺える。



古道「七曲道」の整備

(奈良県・大和郡山市)

大和郡山市山田町～平群町への山道(七曲道)は、昭和30年代までは日常的に利用されていたが、近年では自動車社会への変遷とともに廃道同然となった。「やまと郡山環境を良くする市民の会」は、地元自治会、地元中高一貫校の生徒有志の手で古道を約350m整備し、地域の隠れた魅力を掘り起こし散策路として甦らせた。活動には小中学生も巻き込み「七曲道」を後世につないでいくことに留意。

今年度からは、「歩きやすい道」から「歩きたくなる道」として四季の変化を表す樹木等を植える工夫も凝らしている。活動内容は、七曲道の整備の他にも、市内の河川や道路の清掃の実施など、地道な地域づくり活動を継続している。



甦った出雲大社の門前町ー神門通りー

(島根県・出雲市)

出雲大社の参道にあたる神門通りは、車社会の到来や、最寄りのJR大社線の廃線などにより、参拝者の導線が変わり、かつての賑わいが無くなった。こうした中、平成の大遷宮、神門通りの再整備等が呼び水となり、神門とおりを愛する商店主、住民、ファンが一体となり平成20年に「神門通り甦りの会」を発足させ「まずは行動、行動しながら考える」「金はなんとかなる」を信条に、イベント事業、情報発信事業、修景事業、おもてなし事業を実施している。

特に「神門通り甦りの会」では、神門通りを有効活用するために「神門通り」おもてなし特区として認定を受け、歩行空間に「おき座」「フラワーポット」を設置し、魅力向上に繋がっている。平成17年26店舗だった商店街が、平成19年以降新たに46店舗出店し、現在72店舗と、神門通り全体の魅力向上に繋がっている。



石州赤瓦と歴史を活かしたまちづくり

(島根県・江津市)

昭和30年代まで市の中心であった地域だが、各官庁施設の移転により地域の活力が失われていた。その中、解体除却が目前となった旧役場等の保存・改修・活用からまちづくりが提唱され、地域交流センターとしての活用や、無電中化等の街なみ整備を実施しており、歴史的な街なみを活かした地域活性化に取り組む「本町地区歴史的建造物を活かしたまちづくり推進協議会」が平成15年に発足。亀山城跡の調査など数多くの埋もれた地域の歴史を掘り起こす活動を行っている。

本地域は観光地を目指すような顕著な地域づくりではなく、小中学生の総合学習や、住民への歴市まちづくり教養講座等を住民が主体的に実施しており、地域活性化イベント「本町ぶらり」は10回目を数え、500人規模から2000人を超える規模となり、江津市において定着した行事となった。



復活松原泉～住民の熱い思いで松原泉・小川を再生～

(愛媛県・松山市)

再生松原泉は、重信川の堤防整備進展に伴い消失した松原泉を再生したものである。泉再生にあわせ、平成15年9月に地域住民を主体とした「松原泉を再生・保全する会(現 松原泉を管理する会)」が発足した。

計画段階から維持段階まで一貫して地域住民が主体となり取組を行った先進的事例で平成18年7月の完成後も、市と連携し100名規模の除草、外来種除去などの維持管理活動を年2回実施するなど精力的に行い、生物の保全空間を適切に維持し、地元小中高および大学までが利用する環境学習の場として提供している。また俳句大会や観月会の実施など地域のにぎわい・活性化にも寄与する活動も行っている。



耶馬溪の自然と景観を守る

(大分県・中津市)

「NPO法人 耶馬溪の自然と景観を守る会」は、耶馬溪ダム周辺地域の景観保全活動等を目的に平成19年に発足しました。会発足以来7年間でモミジ約2000本、桜など約300本をダム湖周辺や下流域に植栽し、年3回以上の下草刈りや樹木の手入れを行っています。

また、耶馬溪ダムの水の利用地域である福岡県北九州市をはじめ九つの市や町の住民へも働きかけ、モミジなどの植樹活動等に参加・協力して頂いています。なお、活動開始以来、徐々に活動への理解が広まり、今では遠方にもかかわらず北九州市から100名以上、周辺の市や町を含めると600名以上が参加するなど、活動の輪が広がっています。



大水害からの復興(地域の願いを込めて)

(鹿児島県・さつま町)

平成18年に川内川流域を襲った豪雨災害を受けて計画された河川改修計画で、「虎居区公民館」は安全性の確認や地域資源である虎居城跡をイメージした石積み護岸の整備、住民が川に親しめるような遊歩道づくりなど、計画策定に大きく関わりました。

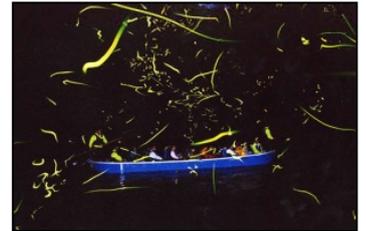
また、河川整備後も災害の教訓を生かして、避難訓練やハザードマップづくりを通じた地域住民の防災意識向上にも取り組んでいます。さらに堤防沿いにモミジやシバザクラ約2,000本を植えるなどの住民主体による景観づくりや完成した護岸を利用したの復興ウォーキング大会の実施など、大水害からの復興に大きく貢献しました。



光に満ちたまちづくり(ホタルとともに)

(鹿児島県・さつま町)

川内川の神子地区に階段護岸やイベントスペースが出来た事を契機に、ホタルの一大群生地というこれまで意識されていなかった地域資源の活用が具体化され、地元有志約40名による「奥薩摩のホタルを守る会」が平成14年に発足。以後、毎年ホタル舟を運航しています。手づくりの地域おこしイベントとホタルが無数に舞う豊かな河川環境が話題となり、地域の温泉街では運航開始時と比較して宿泊客数が約6倍になるなど、地域振興に大きく貢献しています。また、河川清掃などホタルの生息環境を守るための活動にも継続して取り組んでいます。



古道ハンタ道(歴史の道)と世界遺産。郷土を愛し地域をおこすサークル活動

(沖縄県・中城村)

中城城跡の世界遺産登録を契機に中城村が開設した案内ボランティア養成講座の関係者と村内の歴史・研究有志グループが中心となり、平成14年に中城村文化財案内人サークル「グスクの会」を設立した。

「グスクの会」は、世界遺産中城城跡や古道ハンタ道(歴史の道)を中心に、年間を通じ観光客案内や村内小中学生への歴史教育の一環としての説明を行っている。さらに、定期的な美化・清掃活動、ツワブキの植栽などの郷土の魅力向上のための取り組みを行っている。中城城は「ツワブキの城」として沖縄県の「美ら島おきなわ・花と緑の名所100選」で紹介されている。

同会の活動は、村の歴史・文化を県内外へ発信し、村内児童・学生の歴史教育の一翼を担い、観光にも寄与している。



黒塀プロジェクト

(新潟県・村上市)

(黒塀一枚1000円運動と緑一口1000円運動による市民パワーのまちづくり)

村上市中心部の城下町の風情が漂う市道安善小路のブロック塀を、「黒塀一枚1000円運動」を立ち上げ市民の寄付を集め、ブロック塀の上から板を張り、ペンキでぬるといった市民の手づくりで、昔ながらの風情ある黒塀に作り替えた。

一般部門受賞後のH20年からは黒塀通りの緑3倍計画をうちたて「緑一口1000円運動」を開始。紅葉、イチヨウや松などの植樹にも取り組み60本の樹木が植えられ、黒塀と緑のコントラストの美しい小路となった。奇想天外な取り組みは、たちまち話題になり、県内外から視察が訪れ同様の取り組みが全国に波及していき、テレビ新聞等でも取り上げられ、年間20万人が訪れる観光スポットとなった。



【平成19年度 手づくり郷土賞(地域活動部門)受賞】

かわ普請 ～ひょうたん島・青石護岸再生作戦～

(徳島県・徳島市)

高度成長期に工場や家庭から出されたゴミなどで汚れた新町川。「自分たちで汚した川は自分たちの手で再生しよう」を合言葉に、平成2年に「特定非営利活動法人 新町川を守る会」を設立し、河川の清掃活動等をはじめた。当初10人であった会員も現在では300人となり、河川環境啓発の一環として始めた市内中心河川を周遊する「ひょうたん島クルーズ」の乗客は、今では年間5万人を超えるなど、活動の幅を広げてきた。

さらに、平成24年からは、経年劣化により傷んだ青石修景護岸の補修事業に地元住民団体として県内で初めて取り組むなど、まちの景観維持に積極的に取り組み、今ではまちづくりに欠かせない団体となっている。



【平成17年度 手づくり郷土賞(地域活動部門)受賞】

賑わいを今に ～飢肥城下町の取り組み～

(宮崎県・日南市)

日南市飢肥では、過疎や高齢化の進展、観光客の減少などから危機感が強まり、歴史的資源を活かし、観光客の増加を図ろうと昭和49年から市民の寄付等により飢肥城復元事業に取り組みました。

また、昭和51年に「一般財団法人 飢肥城下町保存会」が設立され、飢肥城復元の外、伝統的建造物の保存や本町商人通りの歴史的町並みの再生などに取り組みました。

さらに、こうしたハード整備だけでなく、コンサートや廃油キャンドルによるライドアップ、食べ歩きなどのイベントの充実、観光ガイドボランティアの設置や看板の統一などにも取り組みました。これらの取り組みにより、今では年間20万人もの観光客が訪れるようになり、飢肥城下町の賑わいが今によみがえりました。



【昭和62年度 手づくり郷土賞(いきいきとした楽しい街並み)受賞】